2 〔(文法)文節・文節と文節の関係・係り受け〕

(1)「ネ」などを入れて不自然にならないところが、文節の切れ目。「では、／人間を／他者と／区別する／もっとも／大きな／特徴は／なんだろうか。」となる。

(2)「さまざまな」は、「さまざまだ」という形容動詞の連体形なので一単語。「住んで」は「住む」という動詞の連用形に、「て（で）」という助詞がついたものなので、二単語に分けられる。

(3) 単語に分けると「パーティー／に／分かれ／て／暮らす」になり、四番目の単語は「て」。「分かれて」は、「分かれる」という動詞に助詞（接続助詞）の「て」がついたもの。

(4) 自立語は、それだけで一文節を作ることができる単語。付属語は、自立語のあとにあり、自立語といっしょでなければ文節を作れない単語で、助詞と助動詞のみ。自立語は一文節中に必ず一つあるので、自立語の数を数えるということは、文節の数を数えるのと同じことになる。問題文を文節に分けると、「それも／みな／買い立ての／真新しい／ものだった」となる。「それ」「みな」「買い立て」「真新しい」「もの」が自立語。

(5) **a**の「バランス」と、**b**の「完成度」を入れかえて、「完成度とバランスを」にすることができるので、並立（対等）の関係。

(6)「夕食時」どうしたのかと考える。「夕食時、ぼくは」を「ぼくは夕食時、」としても、「夕食時、」を「おじいさんに」の前に置いても、「伝えた」に係る。

(7)「はたして」は、あとに疑問や仮定を表すことばをともなう呼応の副詞。ここでは「～か」と呼応し、疑問を表す。

3 〔(文法)品詞の識別・動詞の活用〕

(1)① 品詞を識別するには、自立語か付属語か、活用するか活用しないか、などによって目安をつける。「大いに」は、自立語で活用しない。動詞や形容詞は活用する。連体詞は、連体修飾語になる単語。「大いに」は、「役立っ（ている）」という用言に係る連用修飾語になっているので、副詞ということになる。

② **ア**の「若い」は形容詞、**イ**の「その」は連体詞、**エ**の「閉ざす」は動詞。

(2) 動詞の活用の種類を問う問題である。活用の種類には、五段活用、上一段活用、下一段活用、カ行変格活用、サ行変格活用の五つがある。まず、それぞれの動詞を終止形に直す。そしてその動詞を「ナイ」に続けて、活用語尾がア段の音になれば五段活用、イ段の音になれば上一段活用、エ段の音になれば下一段活用と見分ける。カ行変格活用の動詞は「来る」の一語、サ行変格活用の動詞は、「する」と「○○する」の複合動詞。「かかわっ（かかわる）」と「走れ（走る）」は、五段活用。「練習しろ（練習する）」はサ行変格活用。「起き（起きる）」は上一段活用、「食べ（食べる）」は下一段活用である。

(3) 動詞の「音便」は、五段活用の動詞の連用形が、「て・た・で・だ」などに連なるとき、その活用語尾が「い・ん・っ」の形になるもの。選択肢の中から、まず五段活用の動詞で、活用語尾が「い・ん・っ」のものを選ぶ。**エ**の「用いた」の「い」は、「用いる」という上一段活用動詞の活用語尾なので、音便にはあたらない。

4 〔(文法)まぎらわしい品詞の識別・意味用法の識別〕

(1) **ア**と**イ**は、それぞれ「使う」「問う」という動詞に、受け身の意味を表す助動詞「れる」がついたもの。**ウ**は、「とる」という動詞に「できる（可能）」の意味が加わった可能動詞「とれる」の一部。**エ**は、「支える」に「られる」という受け身の助動詞がついたもの。**オ**は、「くれる」という補助動詞の一部である。

(2)① 例文と**イ**は、それぞれ「きれいだ」「豊かだ」という形容動詞の終止形の活用語尾。**ア**は、断定の助動詞。**ウ**は、過去の助動詞。**エ**は、伝聞の助動詞「そうだ」の活用語尾。

② 例文と**イ**は、手段・方法を示す格助詞。**ア**は、形容動詞「平和だ」の連用形の活用語尾。**ウ**は、推定の助動詞「ようだ」の連用形の活用語尾。**エ**は、補助用言「いる」に続ける接続助詞。

5 〔(表現)見出しが伝えるねらいを表現する〕

記事の内容と見出しとをよく照合する。Aの「新たな歴史」とは、記事の「創部以来初の三連覇」にあたるので、Aを選んだ場合は、起きた事実を伝えるのがねらいになる。Bの「春にも歴史を」は、「優勝経験のない春の県大会を制する」ということから、地区大会で優勝したように、新たな歴史を刻むような活躍をしてほしいという期待を述べることがねらいになる。どちらを選んでもよいが、二つの違いを理解したうえで書くこと。

SAMPLE